▪ヴィジランテ ―スクライド ILLEGALS―

カズくん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーロー飽和社会。

オールマイトを筆頭に活躍するヒーロー達の光は、同時に濃い闇も浮かび上がらせていた。

日本各地に小規模ながらも点々と存在するスラム街がその最たるものだ。

そこでは、ヒーローよりも迅速で、苛烈なヴィジランテが一定の支持を受けていたのだ。

そんなスラム街に住む青年、カズマ。

彼の名は、金さえ積めばどんなヴィランとも戦い、常勝無敗、ヴィジランテ名シェル

ブリットのカズマとして、徐々に広まっていく。
ヒーローもヴィランも、無視できぬほどに。
※僕のヒーローアカデミアとスクライドのクロスオーバーです。
こんなタイトルですが、ヒロアカ本編に沿って進んでいくので、ヴィジランテのストーリーとは一切絡みません。
オリジナル設定は、ライバル役のプロヒーローの個性の詳細と、ヴィジランテの扱い、日本にスラム街ができています。

目　次

プロローグ―ヴィジランテ―　――　1
カズマ　――――――――――――　7

プロローグ―ヴィジランテ―

ヒーロー飽和社会と呼ばれる昨今、その強い光は一部に濃い闇を残していた。

日本各地に決して広くはないものの、点々とできたスラム街とでも呼ぶべき場所等はその筆頭ともいえるだろう。

スラムの周囲には有力なヒーロー事務所もなく（逆説的に有力なヒーロー事務所がないからこそスラムになっているともいえるが）ヴィランとも呼べない犯罪者予備軍のチンピラの溜り場や、大物ヴィランの隠れ蓑になっていたりと、犯罪の温床ともいえる場所になっていた。

そんなスラムのひとつ。

長年手入れされていないと思われる廃ビルの屋上に、深夜にも関わらず１０人ほどの男たちの姿があった。

屈強な異形型個性の者、手元でナイフを弄っている者、自らの個性を見せつけるように発動している者など様々だが、共通点を上げるとすれば、全員が暴力の臭いを濃く漂わせていること、屋上の中央で椅子に縛られて口にガムテープを張られている唯一身綺麗な男性にニヤニヤとした笑みを見せていることだ。

バタフライナイフを手元で弄っていた細身の男が、キーキーと耳障りな高音で身綺麗な男性に話しかける。
「なあ、議員さん。俺達としてもそんなに時間は使いたくないのさ。ここいらのヒーローは腑抜けばかりとはいえ、時間かけて数が集まると面倒だ。だから優しくするつもりもねぇ。」
ナイフの腹で男性の頬を叩きながら、男は続ける。
「ちょおっとあんたの活動資金ってやつを分けてくれればいいんだよ。そうしたら俺達も何もしないさ。どころか、あんたにちょっかい出そうとした奴はシメてやってもいい。悪い話じゃないだろぉ?うん?」
そういうと、男性の口に張られたガムテープを一息に剥がした。
男性は額に青筋を浮かべると怒鳴り散らす。
「ッー!ふざげるなッー!貴様らのようなチンピラに誰が!」
そこまで口に出したところで、男性の左耳にナイフが振り下ろされた。
半ばほどでナイフがひっかかったため切断されてはいないが、激痛が男性を襲う。
細身の男が絶叫をあげる男性の腹を蹴り飛ばし、椅子ごと地面に倒した。
さらに悶えているところにツバを吐きかける。
「だから言っただろ?優しくしねぇってな。おい、金の在処を吐くまでボコれ。吐くま

で殺すなよ。」
どうやら細身の男が一番立場が上らしい。
男の声に反応して、周囲のチンピラ達がニヤニヤと笑いながら男性ににじり寄る。
男性の目が絶望で暗くなっていく。
その時、地面から見上げるようにチンピラ達を見ていた男性の目に”緑色の光”のようなものが映った。
直後、上空から何かを噴射するような音が響く。
音に反応して細身の男が空を見上げると、驚愕に目を見開いた。
「なっ!まさか、シェル・・・!」
「衝撃のファーストブリット・・・!」
轟音。
頭上から一直線に落下してきた”ナニカ”によって、その廃ビルは一撃で倒壊した。

★★★★★

市議会議員が誘拐され、その日のうちに誘拐されたはずの議員が気絶したうえに簀巻きの状態でヒーロー事務所の前に投げ捨てられているという事件が発生した翌日。
スラムで発生したビル倒壊事件を地元の警察が調査していた。
銜え煙草の中年男性刑事と、若い制服の男性警官が完全に崩れ落ちたビルの前に佇んでいた。
若い警官が粉々になったビルの破片を摘みあげて顔をしかめる。
「こりゃ酷いですね・・・。ヴィランの抗争ですかね?」
中年刑事は煙を吐くと、違うね、と否定した。
「昨日の市議会議員誘拐事件あったろ。あれの現場がここなんだとよ。目撃証言から言って、こりゃあ”奴”の仕業だなぁ。」
「奴・・・ですか?」
若い警官は不思議そうに首を傾けた。
それを見て、中年刑事はポン、と手を鳴らす。
「そういえばお前さんはこっちに来たばっかりだったか。ここらじゃあ知れた名前の奴が居るんだよ。”シェルブリット”。聞いたことないか?」
「ええっと・・・ヒーロー、じゃないですよね。ヴィランですか?」
「ヴィラン、か。まあ、法に則るならヴィランになるんだろうな。ここいらの奴らにシェ

ルブリットがヴィランだ、なんて言ったら何されるかわかったもんじゃないがな。」
中年刑事が苦み走った顔で言うと、若い警官はなお不思議そうにする。
「つまるところ、どういう事なんです？」
ケッ、と舌打ちをひとつ打った中年刑事が吐き捨てるようにいった。
「ヴィジランテって奴だよ。俺ァあいつはそんな良いもんじゃないと思ってるがね。」
「ヴィジランテ・超常黎明期に多くいたっていうあの？」
ヴィジランテとは、いわばヒーローの源流。
まだ個性に対する法整備ができていなかったころに活動した者たちの総称だ。
激化する個性犯罪に対し、自主的に立ち上がった者たち。
時に行き過ぎる正義でヴィランを殺害することすらある過激な活動を行っていたとされる。
今では、ヴィランの制圧活動は資格を取ったヒーローが行っているので、無資格の者がヴィラン相手に個性を振るえば、基本的には犯罪となる。
ゆえに、ヴィジランテは過去の遺物とされている。
が、例外はある。
例えばこのスラム街のように、ヒーローの手が届き難い場所で。
例えば様々な理由でヒーローに依頼ができない者が。

例えばヒーローではできない行き過ぎた正義を求める声が。
ヴィジランテを求めるのだ。
特にこのスラム周辺では、ヴィジランテが多く活動していた。
その中でも、1年ほど前から名が売れ出したヴィジランテが、”シェルブリット”。
目撃証言からすると、男性、逆立ったような髪型で、個性は単純な増強系と思われる。
金さえ積めばどんなヴィランとも戦う上に、全戦無敗。
このスラム周辺の住民からはヒーローよりよほど役に立つとまで言われている。
事実、スラム周辺での犯罪件数は彼の台頭から右肩下がりだった。
既にその名は、この一帯のみならず、周囲にも知れ渡り始めている。
ネットを通して全国に名が知られるもの時間の問題と思われた。
「なんというか、凄まじい奴ですね。そんなのがこの辺に潜んでいるんですか?」
若い警官は恐々と周囲を見渡した。
「安心しろ。奴はカタギには手を出さないことでも有名だ。あっちから何かしてくることはねえよ。」
手を出さなければな、と付け足された言葉に、若い警官はぶるりと身を震わせた。

カズマ

市議会議員の誘拐、救出、ビル倒壊といった事件が起こった翌朝。
事件が起きたのと同じスラム街の一角にある建物に、こそこそと侵入を試みる影があった。
まず建物から語ろう。
その建物は、古びてはいるものの小綺麗で、よく掃除されている印象を受ける。
更に観察眼の鋭いものなら、高い位置になるほど掃除が疎かになることから、子供か背の低い異形型の者がよく掃除をしているのだろうという事に気付けるだろう。
元々は診療所かなにかだったようだが、既に診療所としての機能を無くして久しいのか、診療所独特の臭いはもう残っていない。
そんな建物にこっそりと侵入を試みている青年は、茶色の髪を目にかからないように分けており、緑色の長袖長ズボンに茶色のジャケットを羽織っている。
泥棒というよりも、朝帰りのサラリーマンがこっそりと帰宅している様を彷彿とさせる様子で、こっそりと玄関を開けて家の中に入っていく。
このこそこそとしている青年こそ、何を隠そう最近この辺りを賑わせているシェルブ

リットのカズマである。
戦闘中の堂々とした立ち振る舞いもどこへやら、物音一つ立てないように抜き足で歩き、ゆっくりと玄関の中に滑り込んでいく姿は、少々情けなくもある。
玄関から入ってすぐ右手の部屋の扉を音をたてないように開けたところで、彼に不機嫌そうな声がかかった。
「お・か・え・り。カズくん！」
「げぇっ！あ、あぁ。ただいまカナミ。」
カズマが振り返ると、そこにはぷくーっと頬を膨らませて不機嫌オーラを漂わせる少女の姿があった。
彼女はカナミ。
幼いながら、スラムで荷運びや家事手伝いなどで稼ぎを得ている、カズマの同居人の少女だ。
「もう、どこ行ってたの？親方さん、探してたよ。」
親方さんというのは、カズマがよく日雇いで働いている（働かされているが正しい）土方の親方である。
周囲から見たカズマは、碌に働きもせずに、年端のいかない少女の稼ぎで暮らすロクデナシなのだ。

オマケに肉体労働からすぐ逃げる根性なし。
そんなカズマと一緒に暮らして支えているカナミの評判は周辺の住民からはとても高く、半ばアイドルのような扱いを受けていた。
まあ、そんな風にカナミの評価が上がる分、反比例的にカズマの評価が更に落ちることにも繋がっているのだが。
カズマはカナミにバツが悪そうに答えた。
「仕事だよ、仕事。」
「また君島さんの紹介の仕事？いくら稼げたの？」
「・・・ん。」
そっぽを向いたまま、カズマはポケットから出した幾ばくかの紙幣と小銭をカナミに渡す。
ちなみに紙幣は千円札であり、それも2枚しかない。
それはを見たカナミは、怒るでもなく悲しげに眉を寄せた。
カズマからしてみれば、まだ怒鳴られた方がマシだと感じる反応だ。
「・・・これだけ？」
「・・・ああ、いや、それがさぁ。」
「もう言わなくていいや。」

「なんだよ！言わせろよぉ！いや、途中まではよかったんだ、だけど作業中にちょおっとよそ見したらでっかいミスやらかしちゃってさぁ！」
はあ、とカナミはため息をひとつついて、
「長続きしないね。」
「そうね・・・。」
「甲斐性なしの、ろくでなしだ。」
「そうね・・・。そこにクズとウスノロを足してもいいよ・・・。」
がっくりと項垂れるカズマ。
項垂れているカズマにカナミが声をかけようとした時、ノックの音が家に響いた。
返事をする前に開け放たれた扉から、一人の男性が入ってくる。
年のころはカズマと同じくらいだ。
彼が先ほど話にも上がった、カズマに仕事を斡旋している君島邦彦である。
「よ！カズマ君元気ぃ？」
「なんだお前かよ。とっとと帰れ。」
「おまっ、いきなりそれかよ！」
「どうぞ。後でお茶をお持ちします。」
「ありがとー！」

「いらねえぞ！」
カナミがお茶を入れに家の奥に消えていった後に、カズマは無言で先ほど入ろうとしていた玄関の右手の扉・・・自室へと入る。
もとは診察室だったのだろう、少し広めの部屋だ。
君島も勝手知ったるといったやつなのか、カズマに続いて扉を閉めた。
カズマは背中越しに君島に話しかける。
「んで？何しに来たんだよ。」
「仕事だよ、仕事。ヴィラン退治の時間だぜ、正義のヒーロー君。」
カズマはケッ、と舌打ちをひとつつくと、元々診察に使われていたのだろう、大きめの椅子にどかりと座り込み、君島と向き合った。
「相手は？」
「液体状の異形型。クライアントの大事な宝石を持って逃走中だ。既にヒーローも出てきてるらしいから、捕まる前にふんじばって宝石を回収してきてくれってさ。」
「ふーん。で、金は？」
「ふっふっふ。聞いて驚けよカズマ君。なんと５０万！」
「マジで!?」
高額の依頼に、カズマは勢い込んで立ち上がった。

「よっし！いいぜ！７：３で受けてやる！」
クライアントとの交渉及び、仕事を見つけてくるのが君島。
それを実際にこなすのがカズマ。
ゆえに、クライアントの出す報酬を分割するのが彼らのいつものやり方だった。
カズマのいう７：３は、カズマが７割、君島が３割で報酬を分割しようという意味だった。
「いや、２：８だ。」
「開きがありすぎんだろ！」
「てめぇがボリすぎなんだよ！今回の仕事取るのに結構金バラまいてるんだぜ？俺だって。」
「俺には金がねぇ！」
カズマのその発言に、君島は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。
「はぁ!?なんでだよ、いい払いだっただろ？昨夜の仕事は！」
「え？ああ、いや、無いものは無いんだよ・・・。」
「はぁ？まさかカズマ、またやりやがったな！馬鹿じゃねえか!?」
「うっせえなぁ！」
カズマという青年には、ある悪癖というか、困った行動にでることが多かった。

スラムで困っている子供が居る時に金を持っていると、ポンと渡してしまうのだ。
既に1度や2度ではない。
そもそも、腕利きのヴィジランテのカズマの一仕事あたりの単価はかなり高く、その悪癖さえなければもっと上等な暮らしができているはずなのだ。
「とにかく！7：3だ！」
「2：8！」
「7：3！」
ぬぐぐぐぐとお互いに睨み合い、しまいにはジャンケンを始めるカズマと君島。
それをお茶を持ってきたものの入るタイミングを無くしたカナミが、ドアの隙間から伺ってため息を吐いた。
またやってる、と。

★★★★★

スラムから少し離れた、整備された綺麗な街並みを、憂鬱な雰囲気を放ちながら歩く

少年がいた。
緑色の癖毛の少年の名は、緑谷出久。
ヒーローを夢見る無個性の少年である。
緑谷の手には、ボロボロに煤けているノートが一冊。
将来のためのヒーロー分析ノートと題が打たれたそのノートは、彼が書き溜めたものだ。
幼少のころに個性が発現することはないという診断結果が出ても、彼はそれを作り続けてきた。
しかし、彼は今、まさに折れかかっていた。
幼馴染の爆轟に、その夢を否定され、ノートは彼の個性で爆破された。
自分の夢と、無個性という現実の狭間で、彼は思い悩んでいたのだ。
そんな緑谷がいつも帰り道で通る陸橋の下のトンネルに入った時、それは起きた。
突如、緑谷の後ろのマンホールから、ズルリと何かがはい出てきたのだ。
「えっ?」
気配を感じた緑谷が振り返った時、それはすでに目の前に迫っていた。
「Mサイズの隠れ蓑・・・!」
緑谷を飲み込もうというかのように、大きく広がった液状のそれは、緑谷に襲い掛か

る。
咄嗟に目を瞑ろうとした緑谷だが、次の瞬間大きな声がトンネルに響いた。
「しゃがんでろ坊主!」
声に反応して、咄嗟にその場に蹲る緑谷。
「誰だ!」
液状のソレ、カズマのターゲットであるヴィランが誰何の声をあげるも、答えの代わりに響いたのは何かの噴出音。
「衝撃のォ!ファーストブリット!!」
しゃがみこんだ緑谷の頭上を、豪風が吹き抜けた。
ヴィランの体が5割ほど辺りに飛び散り、怯んだように後退した。
緑谷は乱入者の姿を見て首を傾げた。
金色と赤をメインの色にして金属に覆われた右腕。
逆立ったような髪型に、右肩には二枚の羽のような装飾。
ヒーローオタクの緑谷は、内心でこんなヒーローいたかな?と疑問がわいた。
「テメェ、まさかシェルブリットか!」
「お、なんだ?俺の名前も知れてきたかな。」
(シェ、シェルブリットだって!?)

緑谷は重度のヒーローオタクだが、彼はそれに伴い、それに連なるような情報もよく知っていた。
シェルブリットといえば、最近名が知れてきたやり手のヴィジランテだ。
（一般人には手出ししないとは聞いてるけど・・・やばい！犯罪者ｖｓ犯罪者じゃないか！）

「おい坊主、危ねぇから下がってな。」
「は、はい！」
ヴィジランテは犯罪者。
とはいえ、先ほど自分を害そうとしたヴィランと、助けてくれたヴィジランテ。
どっちが危険かと考えれば間違いなくヴィランのほうだ。
緑谷はカズマの後ろへと下がる。
だが、その間に先ほどぶちまけたヴィランの体は８割がた元に戻っていた。
それを見たカズマの口角があがる。
「いいねぇ。そうこなくっちゃ。すぐ終わったらつまらねえ。そう思うだろ？アンタも。」
「うぜぇ・・・こうなったらお前を隠れ蓑にしてやるぅ！」

今度はカズマに向かってとびかかるヴィラン。
「上等！正面から突き崩す！」
カズマは大きく腕を引く。
と、背中の羽の小さいほうが消滅すると同時に、緑色の光を放った。
それと同時に、先ほどヴィランが這い出てきたマンホールが吹き飛ぶ。
「撃滅のォ！セカンドォ！」
「私が来た！」
「ブリットオオオ！」
「ＴＥＸＡＳ　ＳＭＡＳＨ!!」
「なっ!?うおおお!?」
爆発的な勢いで前に出たカズマだが、拳がヴィランに触れる前に前方から吹き付けた圧倒的な風圧に吹き飛ばされた。
前方にいたヴィランは勿論、後ろにいた緑谷諸共吹き飛ばされたが、カズマは器用に空中で緑谷を左手で抱えると、右手を地面に叩きつけて制動。
足を地面に擦りながら回転して減速する。
「新手か!?」
左手の緑谷を庇いながら右拳を構えたカズマの視線の先には、ＨＡＨＡＨＡと笑う筋

肉ダルマが佇んでいた。

★★★★★

「ＨＡＨＡＨＡ!!いやあ悪かった!ヴィラン退治に巻き込んでしまった！いつもはこんなミスしないのだが、オフだったのと慣れない土地でウカれちゃったかな!?」

乱入してきたのはＮｏ１ヒーローオールマイトその人だった。

「しかし君達のおかげさまありがとう！無事詰められた！」

先ほどのヴィランはすでにオールマイトによって哀れにもペットボトルに詰め込まれていた。

あれではもうなにもできやしないだろう。

しかし、カズマは内心冷や汗を浮かべていた。

拳が触れ合ってすらいないのに、あの風圧。

カズマの個性、シェルブリットは単純な増強系の効果と、背中にある３枚の羽を消費して打ち出すブリットの二つの能力がある。

全部で3回ブリットは使用でき、数が大きくなるほど威力も上がる。
羽は個性を発動しなおさないと回復しないが、その分強力な技だ。
それをただのパンチで無効化された。
吹き飛ばされたのはセカンドとはいえあの威力。
ラストブリットでも打ち勝てるかわからない程のパンチだった。
「ところでそこの君！」
「お、俺か！」
オールマイトがビシッとカズマを指で示す。
「今回は正当防衛として見逃すが、個性の使用は本来厳禁！犯罪だぞ！」
「い、以後気を付けます！」
「よろしい！じゃ、私はこいつを警察に届けるので！液晶越しにまた会おう!!」
言うだけいうと、オールマイトは背を向けてぐっとしゃがみこむ。
緑谷がそんなオールマイトに駆け寄っていった。
「まって、まだ・・・」
「プロは常に敵か時間との闘いさ。それでは今後とも、応援よろしくねー!!」
ドヒュウンと音を立てて、オールマイトは飛び立っていった。
「・・・スーパーマンかよ。」

一瞬戦闘になるかと身構えていたのが、なんとも毒気の抜かれてしまったカズマ。
そういえばさっきまでいた坊主はどうしたんだ？と辺りを見回すが、いつの間にかいなくなっていた。
ふと空を見上げると、飛び去って行くオールマイトの腰元にしがみついている緑谷の姿が見えた。
「・・・意外と根性ある坊主だな。」
そうひとりごちると、カズマはポケットの中身を出した。
握りこぶし程もある青い宝石だ。
実はターゲットの宝石は、最初のファーストブリットを打ち込んだときにかすめ取っていたのだった。
「ま、仕事も済んだし。君島と合流して帰るかね。」
この時のカズマはまだ知らない。
この先、自分が先ほどあったＮｏ１ヒーローと緑谷出久の両名と関わっていくことになることを。